

「美しいやまぐちづくりへの思いを語る」という題で原稿の依頼を受けたが、さっぱり筆がすすまない。年末を控えた慌ただしさもあるが、「美しい」という言葉に引っかかってしまい、「美しいやまぐちづくり」とは何か、うまくイメージできないからである。

そこで、少し調べてみることにした。

「美しい」と「きれい」というふたつの言葉を比較した場合、前者は、語感として後者よりも複雑さをもっているようである。普通の日本語では、澄みきった水を「きれいな水」と言うし、偽りのない心を「きれいな心」と言う。両者が同義に使われる場合もあるが、「美しい水」とはあまり言わない。

いっぽう、「美しい」景色の構成要素に「きれいな」水や「きれいな」花木などが含まれることもあるが、そうでない場合もある。たとえば、セーヌ河の流れが濁っていても、パリの水辺の景色の美しさを否定する人は少ない。また、実際には必ずしもきれいでない町並みが、美しい町並みの絵や写真として受け取られていることも多い。

こうしたことから、美とは感覚的なきれいさではなく、心によって生じる精神の所産であることが伺える。

日本語の美や美しさの中には、古語の「うつくし」「うるわし」の双方の意が含まれている点に注意が必要であるが、漢字の構造からみた場合、「羊」が大きな意味をもっており、義や善などに使われている羊と同様に「犠牲」という内的意義をもたされている言葉とされている。犠牲を意味する羊が大きい美には、義や善に比べて、高い精神的な価値が与えられており、道德の至上理念である善よりも高いものとして捉えることができるという。

ところで、十日ほど前になるが、景観調査で長門市東後畑の棚田を訪ねた。この地の棚田は『日本棚田百選』にも選ばれ、日本海の漁り火と棚田を被写体に多数の写真愛好家が県内外から集まることでも知られているが、この日は誰一人いなかった。しかしながら、この地の自然と向き合いながら、ため池を設けて水利を確保し、傾斜地に棚田を開き維持してきたことを思うと、冬枯れの棚田の背景には夕日も漁り火もなかったが、十分に美しい景色であった。

・参考文献：今道友信『美について』